

会議議事録

| | |
|------|--|
| 会議名 | 第1回 教育課程編成委員会 |
| 開催日時 | 平成30年8月2日(木) 11:00~12:30 |
| 場所 | 本校舎2階 会議室 |
| 出席者 | <p>① 企業等委員</p> <p>遠藤 孝顕 一般社団法人日本アパレルファッション産業協会 事務局長 吉川 順子 株式会社 ポーラ 商品企画部ビューティーライフチーム(アパレル開発担当) ディレクター 津曲 公夫 株式会社 オアシススタイリング 代表取締役社長</p> <p>② 本校委員</p> <p>布矢 千春 本学院学院長 渡邊千佳子 本学院高度アパレル専門科科长 木村 千晶 本学院ファッションビジネス科科长 依田侑里子 本学院ファッションビジネス科教授 山木実千代 本学院アパレル技術科科长 曾根 礼子 本学院教務課長 佐藤佐千枝 本学院教務課員</p> |
| 欠席者 | なし |
| 配布資料 | <p>高度アパレル専門課程 「人材育成像と到達目標」 「実習・演習等において連携する企業等一覧・授業計画」 「特別講義一覧」</p> <p>ファッションビジネス科 「人材育成像と到達目標」 「実習・演習等において連携する企業等一覧・授業計画」 「特別講義一覧」</p> |
| 議題等 | <p>1. 各科の学年の流れと特別講義について</p> <p>渡邊千佳子高度アパレル専門科科长と木村千晶ファッションビジネス科科长より、各科の人材育成像、到達目標、授業構成と学年ごとの授業の流れを説明した。</p> |

| | |
|--|---|
| | <p>2. 質疑応答と意見交換</p> <p>高度アパレル専門科とファッションビジネス科の人材育成や授業について質疑応答と意見交換が行われた。</p> <p>3. 各科の産学連携授業について</p> <p>高度アパレル専門科とファッションビジネス科の産学連携授業について説明した。</p> <p>4. 質疑応答と意見交換</p> <p>高度アパレル専門科とファッションビジネス科の産学連携授業について質疑応答と意見交換が行われた。</p> <p>5. その他</p> <p>教育課程編成委員会での検討事項について</p> <p>布矢院長より次回第2回教育課程編成委員会へ向けての2科の検討事項について説明した。</p> |
|--|---|

以上

第1回 教育課程編成委員会の主な討議内容

○学校側

ドレスメーカー学院も文部科学省が推奨している「職業実践専門課程」について、進学課程を除く本学院4科全科が認定されました。今回からファッションビジネス科は委員が変わった。それぞれ科の特徴と学年ごとの授業の流れを各学科長より説明する。

○各科の人材育成像、到達目標、授業構成と学年ごとの授業の流れを説明した。

○人材育成や授業について質疑応答と意見交換が行われた。

Y委員： 昨年は、もっとカリキュラムについてじっくり伺ったが、昨年指摘した産学連携の授業や中国語を授業に取り入れるなど取組が始まっているのが分る。プレゼンテーションに関しては、具体的にどのようなプレゼンテーションをしているか分からないが、ファッションの仕事は、今まで、言葉で説明するというより“見る”という感じだった。今はどうしても言語化、“どう良いのか”“何が良いのか”“どう違うのか”を言葉でしゃべらないと社会で本当に通用しない。言語でしゃべらないとデザインや色の情報を伝えられず、きちんと言語化することが大事だと思っている。ビジュアルで見ることも大事だが、どれだけ言語で説明が出来るかが大切。バイヤーと話をするにしてもファッションの言語ではなく、分かりやすい言葉で伝えることを訓練しなくてはならないと思っている。

学校側： 高度アパレル専門科は、プレゼンテーションについては4年間で毎年授業をやっているの、他の科と比べるとプレゼンテーションで言語化する能力は高いと思う。さらに強化していかなければならないと考えており、社会的なルールやマナーも含めて個人の感性を表現することは足りないと思っている。学生のボキャブラリーも足りていない。

Y委員： デザイナーになりたいと言う人は、どちらかと言うとコミュニケーションが苦手な人も多いかも知れないが、社会に出るとどうしてもコミュニケーションは必要になる。そこは学生のうちに教えておいた方が良いと感じる。

E委員： ビジネスとしては中国という国を抜きにしては考えられないので、授業として着目して取り入れたのは非常に素晴らしい。また、IT という意識をとっても持たれていてそれが活用できる、動画の編集までやるというのは凄いと思った。去年から感じているのは、企業の意見を伺っているとキーワードとしてCSR (corporate social responsibility) が挙げられる。これは今後徹底して授業の中に取り入れていただいた方が、日本としても個人の人間としても必要不可欠だと思う。学生が就職を決める時に、一番目が福利厚生、二番目にCSRの考え方がしっかりしている企業だという。

また、ビジネスの広がりが増えている中で“シェアビジネス”や“レンタルビジネス”がある。今まで自分の服を所有して、自己満足することが、ファッションの基本だった。今何を求めているかと言うと、クリエイターが雑貨を含めてコーディネートしてくれる、自分では通常考えられない提案をしてもらえるので、ECレンタルを利用する。顧客の9割が“ファッションに自信がない”という。そこにデジタルの活用は不可欠だが、要因としては、本質的なものが分かると人材が大切になってくるのだと思う。

T委員： 業界の中で小売業が大切だと言われて久しいが、小売業の重要性が言われれば言われるほど、核になる仕事が販売だと言われていたが、残念ながら最近その職業の人気のない。ただし、以前の販売の仕事の存在意義と最近の販売職の傾向が変わってきている。以前は入口も出口も“販売”であった。今は入口が販売職であっても色々なドアがあり、その方の努力と企業側とのマッチングが合えばMDのドアやマーケティングのドアも現れ、色々なドアがある。そうすると、販売職に求められているスキルとは一体何だということが大切になってくる。業界の中で共通して欠けているのは、今どんな時代で何が本当に必要なかを自分の存在意義のコアとして持っている人。“シェアビジネス”や“レンタルビジネス”の例は、運営している人たちがマーケットも流れの中で、「このビジネスもあり」とした結果であると思う。大事なのは、今の時代を見ながら、先を読んでいく力の訓練が必要である。

若い時からアンテナを効果的に活用していくことを踏まえると、ファッションビジネス科は販売のスキルの広がりや深さも必要だということを考えていかなければならない。そうすると本当に2年制で良いのかという問題にもなる。感性をカネに替えていくことが本質的なものだとすると、販売職のスキルだけで良いのかと思う。自分はプロの方を対象に講義を持っているが、その中で感じることは、プロになって今の実態を考えながらやって行こうと思ったが、日々の仕事に追われて余裕がない。一つのムーブメントの事例を出して新しいビジネスを生むにはどうしたらいいかというワークショップをやっても中々面白そうなものが出てこない。日々の作業で追われているので、大学や専門学校を卒業して業界に入ってきて本来発揮することを、その前の教育機関である程度のたたき台はしっかり作って欲しい。ケーススタディの勉強や産学連携の授業、インターンシップ等の現在のカリキュラムは一つの方向だと思う。昔は会社に出れば会社が教えてくれるというのがあっ

たが、今の時代は、ちゃんとした学生を採りたいというのがある。学校における期間は、質と量という問題があると思っている。昔みたいにファッション大好きで多少知識がなくても大丈夫という時代ではなくなった。やはり、頭で考えて問題を抽出して解決していく能力が大事で、それを身につけられる教育というのがまだないので目指して欲しい。

学校側： 先を読む力を育てる教育は、今のカリキュラムであるのは高度アパレル専門科の「ブランドマネージメント」のみにとどまっている。専門学校なので、いろいろな知識を身につけることに追われ、ケーススタディも詳しくはやっていなかった。専門店とセレクトショップ等の違いはリサーチさせているが、その企業を詳しく研究させてはいないので、事例研究、ワークショップなどのカリキュラムが足りないと思う。深く考え、行動を起こし、問題解決をする能力をどう鍛えるかは大きな課題である。

T委員： 特別講義も積極的にやっていくべきだと思う。ただし、中身としては教養型の特別講義と実践型の特別講義があって、実践型が足りなく、ケーススタディは数回にわたってそのテーマに対して解決型の提案をやり取りすることを回数重ねていくことでだんだんレベルが上がってくる。両方が必要だと思う。

○各科の産学連携授業について説明をした。

T委員： VMDは小売業の重要さと共に高まってきているスキルだが、VMDはプレゼンテーションやディスプレイの事だけではない。これは企業戦略である。もちろん、技術的なテクニックも含まれるが、企業のVMDも販売スタッフのお客様への見せ方に特化してしまっている。本来は経営者の問題で、目に見えるマーチャンダイジングをするというのは企業戦略で、最後に店頭にまでお客様に手渡すまでの一連の流れがシェア化されているということだ。ここに力点を置いた教育を学校はどこでもやっていない。早めに手をつけないと、ビジネスということがテクニックで終わってしまう。教える方のキャリアとしては販売職から始まって、ビジネスされた方の仕事に写っている人が多い。もう少し上から俯瞰して見た時の考え方を伝えていくのが大事だと思う。本来VMDは、出来上がった商品をどういう風にお客様に見せるかではなく、店頭は何を置くかがスタート時点であり、この考え方によって商品そのものが変わり、結果、ブランディングにも関係してくる。

学校側： 現在の授業の内容はディスプレイで終わっているが、現在の講師と踏み込んでそこまで教育出来るかを話し合い、具体的にブランディングの授業と連動していくのが望ましい。

E委員： 高度アパレル専門科もファッションビジネス科も基本的にメディアとか企業の情報を取り入れる

事はもちろん大事だが、現場を見に行かれる事をやられたら良いのかなと思う。例えば、ワールドは2008年から「ワールドエコロモプロジェクトキャンペーン」をやっていて、リサイクルをビジネスとして取り組んでいるが、具体的にサステナブルと取り組んでいる企業に学生が行って、どういう流れでやっているというところまで理解してもらおうと、新聞等では言われているもの本質的なものが分かってくるのではないかな。多分、記事だけでは中々リアリティがないので分かりにくいと思うが、それが授業の中で出来れば良い。ハンガーなども産業廃棄物としてお金を払って焼却しているが、何度も使えるような形にすることによって企業での社会貢献という形で、また使っている人々の考え方が浸透する。そういった身近にある事を学生が疑問を持ったり考えたりすることに繋がって行けば、サステナブルというのが生きてくるのではないかな。ハンガーなどは高いお金を払って処理しなければならないが、身の周りにあるものがすべて社会的貢献に繋がっているという意識を学生にもってもらおうようなことが出来ればと思う。Eコマースという点では、ここ4年位の間で急激に全売り上げのシェアを高めてきている。そういったものの情報とかセミナーとかあっても良いのではないかな。

学校側： 株式会社ワールドとは、すでにパイプがあるので、こちらでもリサーチをする。Eコマースについての特別講義は実施しているが強化は必要と考える。

Y委員： 授業に商品企画があるが、商品企画をする際にターゲットはどこに置いているのか。「ブランディング」や「マーチャンダイジング」の授業をするのであれば、自分が好きだから作ってみましたというのだと物足りないと思った。世の中に出ていくための勉強としてターゲットは絞った方がよいのではないかな。ターゲットは必ずあると思うが、ちゃんとそこに届くような物になったのかという検証も必要ではないかな。

学校側： 3年生の授業までターゲット設定は弱いところだと思う。2年生のココベイ株式会社との産学連携授業は、初歩の段階でリサーチ方法を学んだうえで、店舗リサーチの結果をグループで発表する。3年生では企業から素材提供を受けて商品づくりをし、その検証を4年生の「ブランドマネジメント」で行う。今回お聞きしたことを整理してカリキュラムにどう反映するかを検討する。

会議議事録

| | |
|------|--|
| 会議名 | 第2回 教育課程編成委員会 |
| 開催日時 | 平成30年8月2日(木) 14:00~15:40 |
| 場所 | 本校舎2階 会議室 |
| 出席者 | <p>③ 企業等委員</p> <p>森 雄祐 株式会社MORI パーソネル・クリエイツ代表取締役副社長 伊藤 弘子 ZEROZEROESUESU INC. 代表取締役/デザイナー 中村 康太郎 株式会社日本アパレルシステム サイエンス 代表取締役社長</p> <p>② 本校委員</p> <p>布矢 千春 本学院学院長 峯岸 恵 本学院服飾造形科科长 山木実千代 本学院アパレル技術科科长 相場 千枝 本学院本学服飾造形科教授 曾根 礼子 本学院教務課長 佐藤佐千枝 本学院教務課員</p> |
| 欠席者 | なし |
| 配布資料 | <p>服飾造形科 「人材育成像と到達目標」 「実習・演習等において連携する企業等一覧・授業計画」 「特別講義一覧」</p> <p>アパレル技術科 「人材育成像と到達目標」 「実習・演習等において連携する企業等一覧・授業計画」 「特別講義一覧」</p> |

| | |
|------------|--|
| <p>議題等</p> | <p>6. 各科の学年の流れと特別講義について 峯岸恵服飾造形科科长と山木実千代アパレル技術科科长より、各科の人材育成像、到達目標、授業構成と学年の流れを説明した。</p> <p>7. 質疑応答と意見交換 服飾造形科とアパレル技術科の人材育成や授業について質疑応答と意見交換が行われた。</p> <p>8. 各科の産学連携授業について 服飾造形科とアパレル技術科の産学連携授業について説明した。</p> <p>9. 質疑応答と意見交換 服飾造形科とアパレル技術科の産学連携授業について質疑応答と意見交換が行われた。</p> <p>10. その他 教育課程編成委員会での検討事項について 布矢院長より次回第2回教育課程編成委員会へ向けての2科の検討事項について説明した。</p> |
|------------|--|

以上

第2回 教育課程編成委員会の主な討議内容

○学校側

服飾造形科とアパレル技術科についてそれぞれカリキュラムの説明を聞いていただき、総合的に足りない点やご指摘がありましたらそれを検討してカリキュラムに反映していきます。

○各科の人材育成像、到達目標、授業構成と学年ごとの授業の流れを説明した。

学校側： 服飾造形科は2年の課程から進学してデザイナーなど専門職を目指す学生と、2年で就職する学生が入学するので、同時に2年間教育していかなければならない難しさがあるが、造形の基礎はきちんと教育している。アパレル技術科は専門職のパタンナーを目指していくことに変わりはない。去年から変わった点は、パターンメイキング技術検定試験1級に挑戦することにした。1級は教員やプロのパタンナーが対象となっている。専門学校で3年かやっていたら2級までは到達できると思うが、1級も受験して結果がどれ位になるのかは未知数だが、合格者を出せばドレメの技術力教育力の高さを証明できると思っている。

I 委員： 検定に挑戦するのは大変な事だと思うが、実力が分かりやすく良いことだと思う。

M 委員： 就職試験でも、時間内にトワルを組ませるのでトライアルとしてはとても良く、練習しているのとしていないのでは結果に差がでてくると思う。

I 委員： 中国語の語学の授業が増えたりしているが、学生はその意味を理解しているのか。

学校側： 中国のマーケットについては現状や世界の中での中国の位置づけについて、特別講義のなかで説明している。

M 委員： 語学は実際に会話ができるようには、なかなかならないと思うが、縫製指示書など、実際に使う用語を英語や中国語などで教えてあげると、社会に出た時にデザイナーやパタンナーは役に立つと思う。

学校側： 授業はファッションに関する会話を中心にやってきている。英語の講師には、何を教えて欲しいかは伝えているが、専門用語なので語学の講師が仕様書を理解していないと教えられない。少し時間がかかるだろう。中国語も同様。講師に研究してもらった価値はあると思う。

I 委員： 留学をする学生はどの位いるのか。

学校側： 数年に1人位で、この3年間では2名程度。卒業生ではコンテストの副賞でイギリスに行った学生はいる。留学しようという意識の学生は少ない。ニューヨーク FIT 研修については、1単位を与えている。

○産学連携授業について説明した。

学校側： 産学連携授業の中で実践的なことを学ぶのはとても重要なことだと思っている。但し、服飾造形科の2年間の中で産学連携授業を行っているが、授業時間のかかる造形等と両立するのは大変だが産学をやる事によって意識は変わってくる。

アパレル技術科はインターンシップで体験するのが大切な事なので、今年からインターンシップは就職部に協力をしてもらい、心構え、日誌、評価等を実施するようにした。来年からは、授業に支障のない2年生の春休み、3年生の夏休みに実施する予定。

N 委員： 色々な事がカリキュラムを実践して難しいのかと思うのですが、目指す職種に関するだけでなく、違う観点での講義の場があっても良いのかと思う。

学校側： その点は就職部長からも言われていて、パタンナー希望で就職に結びつく会社でインターンシップに行くのは良いが、生産管理のインターンシップに携わって周辺の仕事の流れを勉強しに行くという考え方のインターンシップもあるのではないかという提案がある。

また、ある有名ブランドにどのようなポートフォリオが就職で通過していくのかということアドバイスをいただいた。パタンナーに求められる要素としてはクリエイションの分かる人を強調していた。アパレル技術科はこれから方向転換して、縫えるのは当たり前、そのうえでクリエイションが分かるようになるカリキュラムに変えていかなければならない。来年度のシラバスにどう反映させるかが課題で、パタンナーだから工業パターンの勉強は当たり前で、感性をパターンに表現できる授業うかということが今後の課題です。

N 委員： クリエーションの分かるパタンナーというのが求められている人材像だと思うが、違う角度の視野を持つということも、インターンシップだけでなく授業の一環としてあっても良いのかと思う。

学校側： 特別講義として、サステイナブルや税金、著作権、メンズファッションの基礎知識等の授業をやっている。違う分野であっても身に付けていくというのは大事かと思う。

M委員： 専門職で言うと、デザイナー、パタンナーの求人が一番多い。その中でスキルとして必要なのは、パソコンのイラストレーター、フォトショップのスキルである。198件の求人のうち81件が絶対必要と回答している。パソコンのスキルアップでイメージマップを作った後にデザインに落とし込むカリキュラムで指導すると仕事をイメージしやすい。イラストレーターやフォトショップのスキルはデザイナーだけでなくパタンナーも必要です。

学校側： 今年からCGの講師を替えた。今までテキストスタイルデザイナーだったので、イラストレーターのスキルは凄かったのですが、ポートフォリオやレイアウト力はどうかと思う点があり、グラフィックデザイナーに替えた。その成果は4月からなのでまだ出ていないが、レイアウト力が必要なのでその力がどう育っていくかを期待している。写真の授業も入れているので、その授業との連動についても教員と話合っていかなければならない。本学としてもポートフォリオのレベルアップが課題である。もう手作りマップという時代ではないので、CGに変えている。インターシップの条件でもイラストレーター、フォトショップのスキルは要求されている。デザイナーを育成している学科だけでなくアパレル技術科もCGスキルをあげて送り出さなければならない。

M委員： CGのスキルは、Eコマース系の人材でも商品開発はしないが、マーチャンダイジングでも必要になってくる。

I委員： 今教えている服飾造形科の授業は、自分の作品を作ってCGを使ってポートフォリオを作っている。最終的にプレゼンテーションをする。そうすると、授業だけでなく普段からいつでも教室でPCが使えるようにする環境整備が必要だ。自宅でPCを使えれば良いがなかなかそこまで到達していない。その意識を教えてあげるべきだと思う。きれいにプレゼンボードをまとめるという着地点を分かるべきで、イラストレーターやフォトショップでなくても、学生は色々なアプリを使っている。それらを使って身近にすぐ作るということを習慣づけさせる。造形技術優先なので、他のクラスの発表会も見せて勉強していくべきではないか。CGの担当教員に前もってアドバイスを受ければ、良いものが作れると思う。

学校側： デザイナーを目指して3年生に進学する学生は、就職活動に向けて、ポートフォリオを作る必要があるが、販売職を希望する学生の場合は、ポートフォリオがいらないのでモチベーションは下がる。プレゼンはコミュニケーション能力にも繋がるのでやらせている。CGは完成度をどこまで引き上げるべきなのかが課題である。CGの講師に声掛けして、プレゼンに来てもらい次に繋げていくのが良いと考える。

M 委員： 販売職で就職する学生は、EC事業部のポジションにつく学生が出てきている。まだ、販売職から引き上げていくという企業の考え方が強いが、就職先も増えてきているので、今後はITの勉強をする意識が高まると思う。“ささげ業務”を身につけておくと、販売職として就職した後も企業から目をつけてもらいやすい。そういった将来のキャリアパスまで見せられるカリキュラムがあると学生も喜ぶのではないか。

学校側： ファッションビジネス科では実際にパソコンの授業が多い。難しいのは入学後“デザイナーになりたい”から専門職を目指さずにファッション業界に関わっていれば良いと変わってしまう学生もいる。プロフェッショナルを目指して欲しいと思っている。今回お聞きしたことを整理して、次回までにカリキュラムにどう反映するかを検討する。